

【佳作】

カエルは月夜に眠る

水島俊（神奈川県 慶應義塾普通部 2年生）

スマホのバイブが鳴り響く。

「メールか。」人体解剖の授業中の僕は、それを休み時間まで無視した。母からだった。いつも通りの取り留めのない話の後ろに、今日は一つガツンとくる事が書かれていた。医者である大好きな叔父が手術ミスで患者を死なせ、自主退職したという内容だった。小さい頃から遊びに行くと高価な顕微鏡でも何でも自由に触らせてくれた。プレパラートの上に花の雌しべや虫の欠片をのせたりして色々な事を教えてくれた。こうして医学部に入ったのは叔父の影響も大きい。僕は実験室のバルコニーから見える遠くの山の形をなぞる様にして、暫くぼんやりと見つめていた。

塾のバイトは七時からだ。まだ四時間もある。僕の足は自然と大学近隣にある母校の附属中学へと向った。中高一貫校で青春を生物部に捧げた僕にとって、この第三理科室は自分の家よりもある意味落ち着く。古い校舎の木匂いと薬品の匂いが、あの頃へと僕を誘うのだった。理科室では生物部の一年生らしき生徒が一人、ブカブカの白衣の袖口を捲り上げて何か作業していた。大きなウシガエルであった。室内には冷んやり生臭い「あの臭い」が漂っている。一瞬、僕は十年程の歳月が空中に消えて、自分が再

びあの時の中にいる錯覚に囚われた。

十一月の雨の日、真黒なゴムの天板の上に、白いホローのトレー。新入部員の僕にとって人生初の解剖だった。中にはヌルヌルと鉛色に光るウシガエルが居た。麻酔をかけられ、身動きすら出来なくなつたカエルは一人一匹。準備は万端だった。僕の心以外は。隣りで手慣れた様子で作業を始める先輩のカエルは麻酔が切れてきたのか、腹の中が開かれたまま足がユサユサ動いていた。僕の心も不安で揺れた。「大丈夫だよ。」先輩の言葉から勇気を貰い、無事内臓を分離し終えた。ホルマリン漬けのカエルの欠片を前に、僕は初めて「命」というものの尊さを実感したのであった。

小柄なその一年生に、「頑張れ」と心の中で励まして、壁に掛つた乾湿度計を横目に見て理科室を後にした。校門に立ち、ふと見上げると、アンドロメダ座に向って伸びる時計塔は五時を指していた。

「しまった。塾のプリント、家に忘れた。」

一旦、家へ立ち寄ると父が居た。

「あれ、父さんどうしたの。今日は早いね。」

「午後外で打合せだったから直帰したんだ。」

父はソファに座ったまま首だけ向けた。

「学、賢人の事、聞いたか。」

「ああ、うん。」

「医者なんてなるもんじゃない。俺は元々弁護士になって跡を継いで貰う為にお前に勉強させて来たんだ。学、今からでもどうだ。」

父はビールを一口飲んで、いつもの様に愚知をこぼし始めた。

「父さん、肝臓悪いんだから、酒程々にね。」

僕は父の愚知をかわしてさっさと家を出た。合理主義一辺倒の父を、僕の曖昧な返答では論破できやしない事は明らかだ。色々説明するのさえ面倒くさかった。

高層ビルの最上階にある個別指導の進学塾に辿り着いたのは、授業開始の二分前だった。青息吐息の状態を落ち着かせようと、フリスタを口に放り込んで出席簿リストを眺めた。

「あいつ、また遅刻かな。」

チャイムが鳴ると同時に、制服姿の鈴木君が駆け込んで来た。

「セーフ！先生、こんばんは。」

高校のラグビー部で活躍する彼は頬に泥がついたまま席に着いた。医学部を目指しているらしいが、その理由を聞いたことはなかった。爽やかな彼の姿を見ていると、わざわざ聞くまでもない様な気がしてくるからだ。

「僕はなんで医者になりましたかっただけ。」

逆に自分に問いかけた。授業が終わると塾長が声を掛けてきた。

「天野君、お疲れ様。ちょっと良いかな。」

「はい、何でしょう。」

「実は冬期講習人手が足りなくてね。出来れば授業のコマ数増やしてくれないかな。」

自分が器用では無い事は解っていたが、頼まれると断りにくい性格が後押しし、引き受ける事になった。まあいいか。バイト代も上がるし。父さんに医学部は高いと嫌味を言われるのも嫌だしな。帰り道、普段より荷物が重たく感じた。果たして上手くやるのか……。自分の勉強も決して楽ではない。山程のレポートに追われる日々だ。しかし受験という人生の岐路に立つ生徒を蔑ろには出来ない。サンドウィッチの具になった僕は柔らかいパンに徐々に締め付けられていく事になった。

僕の不安は的中した。大学の期末試験と重なった頃、知らず知らずのうちに授業は「こなす」状態へと変化していった。以前は生徒其々に合った自作のプリントを用意していたが、今では生徒が解らないと持って来た問題をその場で解くだけになってしまっていた。授業への自信の無さからか、塾には異様な空気が流れているようにさえ感じられた。冬期講習の最終日、鈴木君が目の辺りに痣をつくってやって来た。

「どうしたの？」

「父に殴られました。あんなヤツ、死ねばいいのに……。」

それ以上は聞けなかった。彼は苛立ちと不安で硬直した顔でじつと机を睨みつけていた。「僕のせいだ。」まるで中学受験時の僕を見ている様だった。凍りつくような感情が僕の背筋を駆け上がった。

父は幼い頃から一人息子の僕に執着していた。サッカー好きの父の影響で、歩き出す頃にはボールを与えられ、小学時代は週七日、電車で強豪チームに通わされた。他の選択肢など許されなかった。試合後には一時間の説教。手が出ることもしょっちゅうだった。僕は何とかしてサッカー中心の生活から脱出したくて中学受験を志願したものの、集団塾には六年時からのみ、それまで全ての大会へ出るという条件をつきつけられた。僕は食事の時も風呂の時間も勉強した。成績が上がらないとサッカー同様、父からすぐに手が飛んできた。父はいつも自分がまるでこの世の正義だともいような顔をしている。

いつか父のプライドを粉々にしてやりたいという一心で僕はこれまでやって来たのかもしれない。医学部を選んだ時も反対された。弁護士がそんなに偉いのか。僕は今でも父の事は、どこか冷やかな目でしか見れない。「僕が鈴木君を救わなければ。」心を新

たにした。

家に帰ると母は用事で出かけていて、父は書齋でお気に入りの推理小説を片手にバーボンのグラスを傾けていた。バーボンの時は気嫌が良い。僕の中に小さな悪魔が顔を出した。

「只今、お父さん。」

「学、お帰り。バイトか。ご苦労さん。」

「父さん、なんか気嫌良さそうだね。」

「思いの他、示談が上手くいったんだよ。」

「じゃあ、乾杯だね。折角の日なんだから。どうぞ、どうぞ。飲んで、飲んで。」

僕は酒につき合うふりをして、父に無理失理酒を飲めていた。肝臓が弱いのに、父は嬉しそうに僕の勧めた酒を何杯も飲み干した。「父さんは、学と飲めて幸せだ。」

そう微笑む父を、僕は畏にかかった獲物のように哀れんで見た。

バタン。父が頭からジャガ芋の様に転げ落ちた。息が無い。「父さん、父さん！」返事は無かった。「救急車、救急車、どうしよう。」震える手でスマホのボタンを押した。僕は無意識に賢人叔父に電話をかけていた。

「どうした、学？こんな時間に。」

「叔父さん、父さんが倒れた！」

「待ってろ、直ぐ行くから。大丈夫だから。大丈夫だからな。」

叔父はタクシーを飛ばして十分後に来てくれた。その五分後には救急車もやって来た。まるでテレビドラマを見ているかの様で、現実を受け止められずにマッチ棒の様に立ち竦んだ。偽像のような風景に包まれた闇の中を、叔父と共に救急車に乗り込み病院へ向った。

ピーポーピーポー……。

震えが止まらなかつた。

父は一命を取り留めた。病室の傍らで叔父は優しく僕の肩を抱いてくれた。

「僕、こんなことになるとは思わなくて……。ちょっとだけ父さんを懲らしめたくて……ごめんなさい。」

「いいんだよ。良かったな無事で。いつも兄さんに酒に酔って口うるさい学が付いていて、何でだろうと思っていたんだよ。」

叔父は静かに語り始めた。

「でもな、学。医者を目指すなら、これからは絶対にやってはいけないぞ。お前が一番解っているよな。命っていうものは、一度の誤ちであつという間に消えちまう。あつけない程にな。」

叔父はポンを僕を叩いて帰って行つた。向うには青白い大きな月が浮かんでいて、まるで叔父は神の遣いのように見えた。

それから一週間経つた今でも、僕は叔父から言われた事が胸に引っかかっていた。医者を目指す者が故意に人を死に至らしめようとするなんて：自分の父親を：。そもそも僕は何の為にこれまでやって来たのか。目の前の感情だけで時間を浪費したに過ぎないのか。自分自身が白いトレーに横たわるカエルの様に意思を持たない存在に思えた。サーツと脳内が空っぽになり頭蓋骨の中は真空で満たされた。僕は徐に機の引き出しから、中学生の時の解剖器セットを取り出して、メスを親指と人指し指で摘んだ。細く輝くその美しい姿はあの頃と同じだった。そして迷うことなく手首にスツと赤い線を引いたのだった。浅くても充分だった。深夜二時の空はいつもより澄んでいて、まるで天使が舞い降りて来る様であった。開いた窓から爽やかな空気が流れ込み、気のせいかな少し生暖く感じた。体からスツと力が抜けパタンと横に倒れた。小さく開いた僕の目から、最後に一滴の涙が溢れた。